



特別支援教育指導充実シリーズ2

指導資料

中学校特別支援学級における 将来の自立や社会参加をめざした 指導の充実



平成24年3月

栃木県総合教育センター

まえがき

平成 19 年 4 月 1 日に学校教育法等の一部改正が施行され、特殊教育が特別支援教育へと転換してから 5 年が経とうとしています。各学校におかれましては、特別支援教育のさらなる充実に日々取り組まれていることと思います。

近年、特別支援学級に在籍する児童生徒数は増加しています。本県では平成 13 年度の在籍者数は 1307 人でしたが平成 23 年度は 3020 人と、この 10 年間で倍増しており、それに伴い児童生徒の教育的ニーズも多様化しております。

このような現状を踏まえ、栃木県教育委員会では、平成 23 年度から 27 年度の教育行政の指針である「とちぎ教育振興ビジョン(三期計画)」において、「確かな学びをはぐくむ教育の推進」に「特別支援教育の充実」を位置付け、障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するための様々な施策を展開しています。具体的には、障害のある児童生徒への指導について専門性の向上を図るため、特別支援学級及び通級による指導の担当教員に対し実践的な研修を実施すること、今後特別支援学級の教育を担う教員に対して、特別支援学校との研修交流を行うことなどです。

特別支援学級に在籍する児童生徒数の増加に伴い、特に義務教育の最終段階である中学校においては、障害のある児童生徒の自立や社会参加をめざした指導の充実が求められています。

この指導資料は、中学校特別支援学級の教育をより一層充実するために本年度行った「中学校特別支援学級における将来の自立や社会参加をめざした指導の充実に関する調査研究」の成果をもとに作成したものです。本指導資料をもとに、生徒の自立や社会参加をめざした指導をさらに充実していただければ幸いです。

最後に、本調査研究に御協力いただきました研究協力委員の先生方に深く感謝申し上げます。

平成 24 年 3 月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

【本冊子の構成】

将来の自立や社会参加をめざした指導を充実させるためには？

— 以下のことに取り組んでみましょう【基本編】 p 1 ～p 3 —

- ポイント1 学校全体で実施する3年間の進路指導の計画に則り、進路学習を進めましょう。
- ポイント2 一人一人の障害の特性に配慮し、指導しましょう。
- ポイント3 生徒の「将来への思い」をつかみましょう。
- ポイント4 「将来の自分」から「今の自分」を見つめるよう働きかけましょう。
- ポイント5 進路指導主事、学年主任や他校の特別支援学級担任などから情報を集めましょう。
- ポイント6 保護者との共通理解を図りましょう。

— 実践例を見てみましょう【実践編】 p 4 ～p 7 —

- 実践① 職場体験学習をきっかけにして、自分の将来に希望をもって生活するようになった指導事例（知的障害特別支援学級）
- 実践② 将来の自分を見据え、主体的に目標に取り組めるようになった指導事例（自閉症・情緒障害特別支援学級）

— それぞれの実践のよさは以下のとおりです【実践編の考察】 p 8 ～p11 —

実践①について

- よさ1 「生徒の思い」に沿って具体的に学習を進めたことで、学んだことが関連付けられました。
- よさ2 体験をとおした学習で認められたことが、生徒の自信を育てました。

実践②について

- よさ1 具体的な問いかけにより生徒の将来像を明確にしたことで、将来の自分をめざして行動するようになりました。
- よさ2 生徒が自ら課題意識をもてるよう働きかけたことで、学んだことを生かして学校生活を送るようになりました。

2つの実践から、特別支援学級に在籍する生徒の、将来の自立や社会参加をめざした指導を充実させるためには以下のことがいえます。（p12）

障害の特性に配慮しつつ、生徒の将来への思いをふくらませることが大切です。

【基本編】

生徒の自立や社会参加をめざした指導の一層の充実が、今求められています。

近年、知的障害特別支援学級と自閉症・情緒障害特別支援学級の学級数、在籍児童生徒数は急増しています(中学校知的障害特別支援学級在籍生徒数；H13年度 408人→H23年度 613人、中学校自閉症・情緒障害特別支援学級在籍生徒数；H13年度 50人→H23年度 383人)。在籍児童生徒数の増加により教育的ニーズも多様化しており、特に中学校の特別支援学級では、そうした様々な生徒の多様な進路選択により適切な対応をする上で**将来の自立や社会参加をめざした指導の充実**が求められています。

そこで、特別支援学級に在籍する生徒の、将来の自立や社会参加をめざした指導に取り組む際のポイントを以下に提案いたします。



1

**学校全体で実施する3年間の進路指導の計画に則り、
進路学習を進めましょう。**

将来の自立や社会参加をめざした指導の中核となるのが進路学習です。中学校では1年次の職業の理解や自己理解をスタートとして、2年次に職場体験学習やその体験を生かして立志式や発表会を行い、3年次の進路選択につなげるという形で進路学習を行っています。このことは特別支援学級においても同様です。その際**実際の・具体的な体験**をとおし**ての学習や見通しをもつことができる学習**が特別支援学級の生徒には効果的であることから、**学年ごとに行っている進路学習を関連付けて行うことが大切**です。



2

一人一人の障害の特性に配慮し、指導しましょう。

特別支援学級には、知的障害や自閉症などの障害のある生徒が在籍しています。生徒の**障害の特性に配慮し指導**に当たしましょう。

例えば、知的障害のある生徒は、**実際の・具体的な場面を生かし体験をとおして繰り返して学習**すると、学習内容の理解が進みます。また自閉症のある生徒は、**視覚的な手がかり**などのあるわかりやすい環境のもとでは、**見通しをもって学習に参加**することができます。

このように、個々の生徒のもつ**障害の特性に配慮しながら、生徒のわかりやすさと安心感を念頭に置いて指導**を行うと、生徒は自ら力を発揮するようになります。自ら力を発揮し認められた体験は、**将来の自立や社会参加に役立ちます**。

ポイント



3

生徒の「将来への思い」をつかみましょう。

中学生は、こんな自分になりたいという「将来への思い」をもつようになる時期です。生徒の「将来への思い」は、生徒が興味や関心をもって取り組んでいることや生徒の発言に表れます。1年生の段階では、まず生徒の将来への思いを見取ることから始めましょう。そして生徒の思いを大切に、3年間を見通した進路学習を行いましょう。

進路学習で成功体験や達成感を得た生徒は、自分の「将来への思い」をもとに、自信をもって進路を選択するようになります。職場体験学習などの実際に働く体験をとおして、生徒が成功体験や達成感を得られるよう工夫しましょう。

ポイント



4

「将来の自分」から「今の自分」を見つめるよう働きかけましょう。

学校生活では、生徒が目標を立てる機会が多くあります。その目標を「将来の自分」に近づく1つのステップととらえるよう生徒に働きかけましょう。そうすると生徒は、今の自分の目標を達成する意味付けが明確になります。

例えば、将来「お店で働きたい」と考えている生徒に、「お店で働くために、今できるようになりたいことは何かな」と問いかけ、目標を一緒に考える場面がこれに当たります。生徒は、



将来の働いている自分を思い浮かべながら、「身の回りの整理整

頓をする」といったような目標を立てるかもしれません。それに対し、「整理整頓がうまくできるようになると、お店がきれいになって、お客さんに喜ばれるね」「整理整頓がうまくようになった君は、お店でどんなふう働いているのかな」などと声かけすると、目標を達成することが将来の自分に近づくために役立つと生徒は考えるようになり、目標を達成する意欲も高まります。

ポイント



5

進路指導主事、学年主任や他校の特別支援学級担任などから情報を集めましょう。

進路学習や進路指導を進めていくためには、その実務を担っている進路指導主事との連携が必要です。例えば特別支援学校高等部の体験学習の日程のような、特別支援学級ならではの進路に関する行事の情報が手に入ったら、「進路指導に関する委員会」の年間計画に

位置付けてもらうよう進路指導主事をお願いすることなどがこれに当たります。

進路学習や進路指導についての具体的な話し合いは学年会で行われます。特別支援学級に在籍している生徒に関わる学年会に参加し、進路学習や進路指導についての情報を確認しましょう。また、職場体験のような進路に関わる行事では、特別支援学級担任以外の教師が指導する場面があります。行事に参加する生徒に対して配慮して欲しい点や、参加に当たっての生徒の思いなどを学年会で説明し、理解を求めましょう。

各学校の特別支援学級を担当する教員の数は少ないので、障害のある生徒の進路学習や進路指導について相談できる同僚を探すのが難しい場合もあります。そのような場合には、近くの学校の特別支援学級担任と情報交換することが役立ちます。

特別支援学校高等部への進学を考えている生徒が在籍している場合は、特別支援学校の体験学習や教育相談などの機会を活用し、高等部進学に関する情報を手に入れましょう。そして、入手した情報を校内で共有化しましょう。

なお、知的障害のある生徒を対象とする特別支援学校の高等部は、知的障害のある生徒が学ぶ場であることに留意する必要があります。



6

保護者との共通理解を図りましょう。

障害のある生徒の指導を充実させるためには、保護者の協力が欠かせません。得意なところやがんばっているところを知らせて家庭でもほめてもらったり、生徒の「将来への思い」を保護者に伝えながら生徒の進路について話し合ったりすることをおして、家庭と学校が協力して生徒を育てるようにしたいものです。家庭と学校の両方で認められると、生徒はさらに自分の力を発揮するようになります。また、自分の子どものよい変容を保護者が理解できると、保護者は自分の子どもを肯定的に見ることができるようになります。

生徒の将来への思いを理解する時には、家庭からの情報も役立ちます。生徒の入学の時から積極的に情報を聞きとり、3年間の見通しをもちながら指導するとうまくいきます。特に、生徒が家庭でどんなことに興味をもって取り組んでいるのか、家族の働く姿をどうとらえているのかなどを保護者から教えてもらうことが、3年間の進路学習に役立ちます。

以上、6つのポイントを提案いたしました。次ページからは、将来の自立や社会参加をめざした指導の実際について、実践例を示します。



【実践編】

実践① 職場体験学習をきっかけにして、自分の将来に希望をもって生活するようになった指導事例(知的障害特別支援学級)

1 職場体験学習(マイチャレンジ)実施までの取組

知的障害のある生徒は、成功体験を味わいつつ、実際の・具体的な場面をとおして学習を進めていくと理解が深まる。本校で2年次に行っている3日間の職場体験学習(以下「マイチャレンジ」と表記)は実際の職場における体験をとおして、実際の・具体的に進路学習を進めることのできる機会である。

特別支援学級においては以下の配慮をしながらマイチャレンジを実施している。

- (1) 1年次から本人の特徴・適性を見取り、その能力が生かされる職場を選べるよう配慮する。1年生全員で行う職場見学は、マイチャレンジ前に社会人の働く姿にふれることができる機会である。この見学の結果も2年次の体験先選びに役立てるようにした。
- (2) 2学年の先生方の理解を得た上で、本人の第一希望を大切にす。その際、友人関係も考慮する。
- (3) 1年生の終わり頃から保護者も交えて話し合いを行い、マイチャレンジ参加の方向性を考える。また事前に担任が職場と打ち合わせをし、本人の特徴・適性について理解していただく。

表 進路指導・進路学習のおおまかな流れ

学年	行事・実施内容
1年	・中学校生活の理解 ・本人の特徴や適性を見取り ・職場見学 ※自己理解、職業についての学習は1～3年で行う。
2年	・マイチャレンジ ・マイチャレンジ報告会
3年	・進学先の1日体験学習 ・進路三者面談

2 対象生徒(Aさん)について

本校特別支援学級に在籍しているAさんは口数が少ないが、まじめで係や委員会の仕事は最後まで責任をもってやりとげることができる。一方で、周囲の生徒とはうまく関わるができなかつたり、学習や生活全般に自信のない様子が見られたりした。そのためか1年生の頃は、交流学級での学習に消極的であった。

日頃の発言や行動から、Aさんは介護の仕事への興味・関心が非常に高いことがわかった。家庭では、Aさんが、同居している祖母を世話していたり、家族と共に度々曾祖母の見舞いに行ったり、母親と一緒に親戚が入居している老人介護施設でボランティアを行ったりしている。このような実生活での体験が、Aさんにとって介護の仕事に興味・関心をもつようになるきっかけとなり、1年生の職場見学では親戚が入居している施設を見学することになった。

2年生になり、Aさんは、マイチャレンジを老人介護施設でひとりで行いたいと希望したので、本人の希望をかなえるために、以下の事前調整を行った。

3 対象生徒への指導を意識した事前の調整

本人の願いを実現するため、担任が行ったことは以下のとおり。

- (1) 本人の特徴や障害の特性などについて学校・学年職員と共通理解を図ったこと。
- (2) 特別支援学級の生徒を受け入れてくれる新たな職場の開拓をしたこと。

(3) 一つずつ指示すると行動しやすいこと、動作や言葉がゆっくりなこと、書くことが苦手なことなど、障害の特性や本人の特徴・適性を理解してもらうための、職場との事前打ち合わせ。

4 マイチャレンジ実施中の配慮

職場では、以下に示す施設の方の配慮の下、マイチャレンジを実施した。

- (1) 本人のできることから無理なく取り組めるようにした。
- (2) 仕事の内容を本人の得意な掃除や食事の準備などにした。
- (3) 体験学習の記録「マイチャレンジ日誌」の記入の時間を十分に取った。
- (4) Aさんが仕事に取り組む姿を賞賛した。(利用者の方も感謝していた。)

このような配慮があったので、Aさんは自分の力を発揮して仕事をする事ができた。自分の取組を賞賛されたり、働いて感謝されたりした体験は、達成感や成功体験を味わうことが少なかったAさんの自信を高めるために役立った。

5 マイチャレンジ実施後の生徒の変容

マイチャレンジ実施後、Aさんは将来めざす職業を介護士と定め、進学先も、それまでは母親の勧めのままに希望していた県立高校から、福祉に関するコースをもつ専門学校を希望するようになった。自ら進路先を希望したことに家族も驚くとともに、本人の希望を理解し応援してくれるようになった。

母親は「この子が『専門学校へ行きたい』と自分から言ったのを初めて聞き、それなら子どもの希望をかなえるために応援したいと思いました。」と語っていた。

またこの頃、担任から、クラス全員でこの老人介護施設でボランティアをするよう提案すると、Aさんがその連絡係を務めることになり、クラス全員でのボランティアを行うための仕事に取り組んだ。ボランティア活動では施設の清掃をすることになり、Aさんは真剣に清掃作業に取り組んだ。

3年生になっても、自分から教師に質問したり大きな声であいさつをしようと努めたりする他、学習にも真剣に取り組む姿勢は続いている。長期休みには、ひとりで介護施設に行き修学旅行のお土産を届けたりボランティアを行ったりするなど、マイチャレンジ先とのつながりを大切にしている。

6 将来の自立や社会参加に向けての指導で大切なこと

以上のことから、Aさんにとっては、マイチャレンジが進学先や将来の自分の姿を明確にする上で大きなきっかけになったことがわかる。考えられる要因をいくつか挙げてみる。

- (1) 成功体験を味わいつつ、実際の・具体的な場面を通して学習を進めていく機会として、マイチャレンジを活用できたこと。
- (2) 1年次から本人の思いや経験を見取り、それを生かせる職種での体験や、生徒に合った体験形態を実現することができたこと。
- (3) 障害の特性や本人の特徴・適性を理解してもらえるよう体験先と事前に打ち合わせができたこと。
- (4) 体験中に多くの方から、賞賛やねぎらいの言葉をかけてもらったことで、本人が今までにない充実感や成功体験を味わうことができたこと。
- (5) 夢であった職業を実際に体験することで、自分の将来を現実的に考えることができたこと。

このような実践ができたのは、教職員が生徒を理解し、本人の希望をかなえようと努めたからである。そのためには、日頃から特別支援学級の生徒に対する理解を深めてもらえるような働きかけも必要であった。

実践② 将来の自分を見据え、主体的に目標に取り組めるようになった指導事例(自閉症・情緒障害特別支援学級)

1 本実践の考え方

自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する生徒の中には、その障害の特性から、対人関係をうまく築けず困ってしまったり、将来に見通しをもつことが苦手だったりする生徒が見られる。

そのような生徒が、目標を達成する意味を自分なりにつかめると、目標達成へ意欲的に取り組むようになる。そこで、目標を達成し成長した姿である「20歳になった自分」を想像させ、それに向けて今取り組むべきことは何か考えさせると、生徒の意欲を引き出すことができ、生徒が主体的に目標を達成しようとするのではないかと考え、以下に示す実践を行った。

2 対象生徒(Bさん)について

対象生徒のBさんは2年生、知的障害を伴う自閉症のある生徒である。自動車が好きで、将来は自動車関係の仕事に就きたいと思っている。

Bさんは、友達の気持ちを考えず行動してしまうことや、結果を予期せず行動してしまう傾向が見られた。つまり、自立活動の区分でいう「人間関係の形成」や「コミュニケーション」に課題があった。また、見通しをもちながら取り組むことも難しかった。

3 生徒の将来への成長に向けた目標設定

本学級では、時間割に自立活動の時間を位置付け実施している。自立活動の時間を実施するに当たり、年度当初に一人一人の将来への成長に向けた目標を以下の①～④の流れで決めている。

① 自分を知る

- ・自分のよいところを振り返ったり、友達に自分のよいところをメモに書いてもらったりする。それをワークシートにまとめる。Bさんは「まじめ」「部活動がんばっている」と書いていた。
- ・チェックシートにより、生活面・学習面で、今の生活の振り返りも行った。

② 保護者の思い・願いを知る

- ・20歳～30歳になった生徒のイメージを保護者にアンケート形式で聞き、「こんな人になってほしい」という保護者の思いや願いを生徒の目標設定にも生かした。Bさんの母親は「一生付き合える仲間が一人でも多くいて欲しい」「友達と関わりがもてる人になって欲しい」と書いていた。

③ 生徒の将来に対するイメージをふくらまし、思いや願いを明確化する

- ・上記①と②をもとに、将来の思いや願いをワークシートに記述して明確化した。
- ・ワークシートは、自分の将来像がより具体的に思い描きやすくなるように、“髪型は？服装は？どこで暮らしている？休みの日には何をしている？お仕事は？どんな人になりたい？20歳までにできるようになっておきたいことは何？”など記入項目を工夫した。Bさんは“どんな人になりたい？”には「笑顔がすてきな人」「仲間を思う人」、「20歳までにできるようになっておきたいことは何？」には、「自動車の免許を取る」「友達を増やしたい」と書いていた。

④ 学習面・生活面での長期目標・短期目標を設定する

- ・「将来に対する自分の思い・願いを達成するために」ということを意識させ、“中学卒業後” “卒業までに” “3年生になるまでに”の順番で学習面と生活面の目標を考えさせた。Bさんは、“中学

卒業後”の欄には「特別支援学校に進学する」「自動車の整備士になる」、「卒業までに”の欄には「友達の気持ちを考えて行動する」、「3年生になるまでに”の欄には「友達をhappyにする」と書いた。

4 その後の自立活動の時間における展開

生徒が自ら立てた目標(Bさんは「友達をhappyにする」)を実現するための1つの取組として、自分の気持ちを確認したり、相手の気持ちを意識して状況に応じた行動がとれたりするようになるための自立活動の時間の授業「気持ちを言葉で表そう」「こんなときどうする？」(あわせて6時間扱い)を位置付け、実施した。

(1)教師の働きかけ

以下の2点に配慮し、目標実現を意識付けながら授業を進めた。

・将来の自分と今の自分を関連付けた

常に将来と今の自分を関連付けるために、将来の自分の姿と今の学習がつながっていることを授業の導入・展開の場面で意識付けを図った。

例えば、「整備士の仕事をしていて困ったとき、どう自分の気持ちを伝える？」といった問いかけを行い、将来自分がなりたい姿と今学習していることを結び付けるようにした。

・日常生活で生かしやすい場面を設定した

日常場面の対人関係が円滑に進むように、日常の学校生活を題材に、役割演技を取り入れた授業を展開した。また、授業で使用したワークシートや掲示物は、教室内に掲示しておき、学校生活のあらゆる場面で利用できるようにした。

(2)授業後のBさんの変容

授業実施後、Bさんは、「将来の自分を考えながら、自立活動の勉強を進められた。」「相手の気持ちを考えながら行動することが少しだけできるようになったと思う。」「少し苦手なところもあったけど、自分のためにと頑張ってがんばれた。」と感想を書いていた。このことから、将来の自立に向けて今がんばるべきことがわかり、相手の気持ちを考えながら行動することの意識付けが図られたと思われる。

授業終了後、Bさんは、相手の様子を見ながらそれに合わせて行動したり、友達とのトラブルが減ったりと、学習したことを実際の学校生活の中で積極的に生かそうとしていた。それに伴い、以前と比べて積極的に学校生活を送るようになり、また、将来の進路をより具体的に、見通しをもちながら考え行動する姿が見られるようになった。

The worksheet is titled '目標設定ワークシート' (Goal Setting Worksheet). It features a ladder-like structure representing a timeline from '今の自分' (Current Self) at the bottom to '20歳の自分' (20-year-old self) at the top. The ladder has four rungs, each with two boxes for '学習面' (Learning) and '生活面' (Life). The rungs are labeled with time periods: '2年生の冬休みまでに' (By winter break of 2nd year), '3年生になるまでに' (By becoming 3rd year), '3年生の夏休みまでに' (By summer break of 3rd year), and '中学校卒業までに' (By middle school graduation). To the right of the ladder is a box for '写真' (Photo) and the number '14' with the character '歳' (years old). At the top left, a box asks '20歳の自分' (20-year-old self) and lists questions like '髪型は?', '服装は?', '休みの日は何している?', '仕事は?', and 'どんな人になりたい?'. Below these are the goals: '笑顔がすてきな人', '元気がいい人', '仲間を思う人', and '自動車の整備士'. To the top right, a box asks '家の人の願い・思い' (Wishes/Thoughts of family) and lists '一生付き合える仲間が一人でも多くいて欲しい。' and '友達と関わりがもてる人になって欲しい。'. A thought bubble on the left says '目標を立てよう! (長期目標・短期目標)' (Let's set goals! (Long-term goal, Short-term goal)). At the bottom, there is a section for '今の自分' (Current Self) with a date '平成 22年 11月 2日(火) 氏名 ○○ ○○' and a paragraph of text: '中学生時代は、大人と子供の「分岐点」です。2年生で立志式を迎え、「稚心」を捨て去り、大人になる準備を心身ともに始める時期です。すてきな大人になるために、どんな準備が必要でしょうか? いろいろ思い浮かぶと思いますが、まずはじめに必要なのは、「自分を知る」ことです。今日は、自分のことを見つめてみましょう。'

図 目標設定ワークシート

【実践編の考察】

2つの実践では、生徒が自立や社会参加をめざして成長する姿が見られました。それぞれの実践で何がよかったのか探ってみましょう。

<実践①について>

よさ1 「生徒の思い」に沿って具体的に学習を進めたことで、学んだことが関連付けられました。

知的障害のある生徒は、**实际的・具体的な場面**をとおして、**繰り返し学習**すると教育的効果が上がります。1年次の職場見学、2年次の職場体験学習は、働くことを具体的に間近で見たり、実際に体験したりできるので、知的障害のある生徒にとって絶好の学びの場であるといえるでしょう。

ところで、一般的に知的障害のある生徒は、学習したことを次の学習に関連付けることが難しく、各学年での学習が断片的になりがちです（**図1**）。したがってそれぞれの学年で学んだことが関連付けられないと、せっかくの**实际的・具体的な学び**が断片的となり、学びを3年次の進路選択に生かすことが難しくなります。一方、今回の**実践①**では、各学年で学んだことが関連付けられ、生徒の進路選択に生かされました。

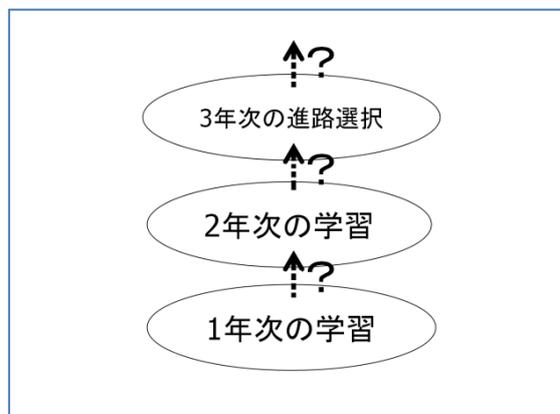


図1

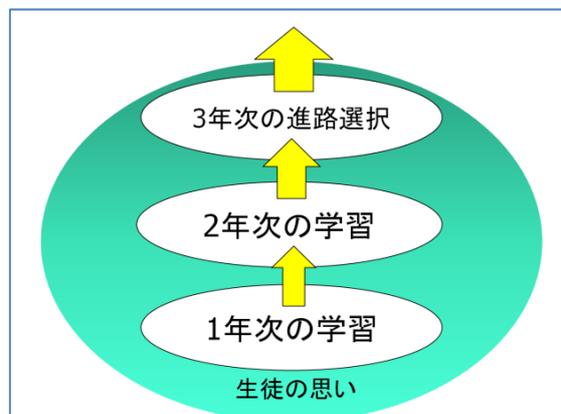


図2

実践①の担任は1年次に、様々な情報から、Aさんが、「**将来は介護の仕事がしたい**」との思いをもっていることを見取っていました。担任はその思いをもとに、1年次の職場見学や2年次の職場体験学習を行いました。

1年次と2年次の学習がAさんの**思いに沿ったもの**だったので、それらの学習が生徒の将来の思いに関連付けられ、その後の進路選択に生かされました（**図2**）。Aさんから見ると、1年次と2年次の学習のそれぞれが共通の思いで学習できたことになり、各学年の学習が、Aさんの思いによって結び付けられたこととなります。

このように、「**将来こういうことをやってみたい**」という**生徒の思い**を1年生の段階

で見取り、それを具体的な活動と結び付けて指導を行うことが、知的障害の特性によって断片的になりがちな学習を関連付け、学んだことを進路選択に生かすために役立ちました。その背景には、常に「生徒の思いを大切にする姿勢」を保ち続けた担任の姿がありました。

よさ2 体験をとおした学習で認められたことが、生徒の自信を育てました。

1年次のAさんにとって、介護の仕事は「将来やってみたい」と思える仕事でしたが、「介護の仕事に就いている自分の姿」はまだ漠然としており、進路の選択肢として明確に位置付けられていませんでした。

しかし、Aさんは、職場体験学習をきっかけに変容し、「介護士になるために専門学校に進む」という進路を自信をもって選択できるまでになりました(図3)。何がAさんの自信を育てたのでしょうか。それは、**体験をとおした実際的な学習で自らの取組を認められた経験が大きかった**といえます。

Aさんにとって、「将来やってみたい」という思いをもった介護の仕事で、自ら進んでお手伝いし認められた経験は、「中学生である今の自分」が認められた経験であると同時に、「将来の働いている自分」も認められた経験になったと思われます。つまり、体験学習をとおして「**将来この仕事で働くことができそうだ**」と思える**経験**をしたということです。

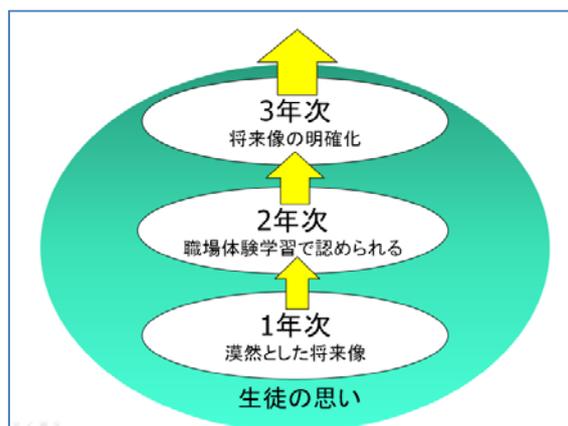


図3

この経験で得た自信をもとに、Aさんは、「介護士」になるための専門学校への進路を自ら選ぶことができました。ここに**介護の仕事で働く自分への思いをふくらませ、将来の自分の姿を介護士として明確にしたAさんの姿**を見ることができます。

知的障害のある生徒は、具体的な生活経験を生かして学んでいきます。職場体験学習で仕事の手伝いをし**実際的・具体的に認められた経験**をしたことによって、「**将来介護士として働いている自分の姿**」がAさんにはっきり見えるようになったと考えられます。



実践①は、体験をとおした学習を有効に活用できれば、生徒の漠然とした将来への思いが明確になり、**主体的に進路選択**できるようになることを示した実践ではないでしょうか。

<実践②について>

よさ1 具体的な問いかけにより生徒の将来像を明確にしたことで、将来の自分をめざして行動するようになりました。

自閉症のある生徒は、見通しがもてるわかりやすい環境では、自ら動くことができます。そこで、見通しをもたせるために目標を立てさせ実行させる指導が多く見られます。

例えば、友だちとのつながりを深めるために「友だちに話しかけられたら返事をする」といった目標を考えさせ、それが達成できるよう働きかける実践がこれに当たります。

このように目標を立てて行う指導の背景には、学校生活が充実するように、さらには卒業後の社会生活に役立つようにとの教師のねらいがあります。しかし自閉症のある生徒にとっては、社会的な関わりで自分の目標を考えることが苦手なので、目標を達成する意味付けができないまま目標を立ててしまうこともあるようです(図4)。図4の「今の目標」とは、現在の学年における目標を指しています。目標を達成する意味付けが十分できていない状態の生徒は、目標を達成する途上でちょっとした挫折を味わうと、「どうせ自分にはできない」「意味がない」などと否定的な感情にとらわれてしまい、目標達成の意欲が失われてしまいがちです。

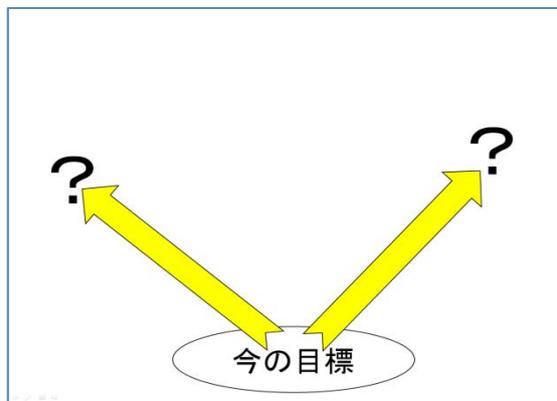


図4

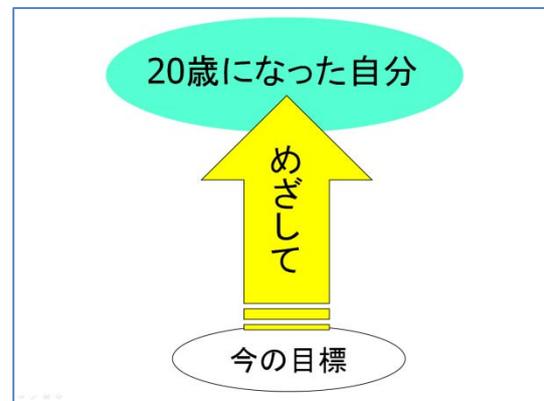


図5

そこで実践②では、「20歳になった自分」をめざして今の自分の目標を達成するよう生徒に働きかけています(図5)。実践②で注目したいのは、20歳になった自分を、具体的・肯定的に十分イメージさせてから今の目標を決めさせていることです。

実践②の担任は、生徒のもつ「よさ」に気づかせながら、具体的に生徒に問いかけて生徒の肯定的なイメージをふくらませるよう働きかけています。「△△ができないあなたは将来こういうことをしたらどうでしょう」では将来像をイメージできません。「○○というあなたのよさを生かして、どんな大人になっていますか」と問いかけることが大切です。自閉症のある生徒に将来の姿をイメージさせるときには、このような具体的・肯定的な問いかけが効果的であることがわかります。

ところで、20歳になった自分をめざすといっても、それに近付くためのステップを生徒がイメージできなければ、今の目標と関連付けて考えることができないでしょう。そこで担任は、20歳になった自分を今の自分へ近付ける形で目標を設定させています(図6)。こうすることで、「20歳になった自分」というめざす方向性を意識しながら、「卒業後」「卒業までに」「3年生になるまでに」「今の目標」という段階を追った目標設定をすることができました。



図6

目標達成の意味が「20歳の自分をめざす」という形で明確になり見通しがもてると、生徒は目標を意識して主体的に行動できるようになることを実践②は示しています。

よさ2 生徒が自ら課題意識をもてるよう働きかけたことで、学んだことを生かして学校生活を送るようになりました。

特別支援学級に在籍している生徒は、障害の特性による困難さを抱えています。例えば自閉症のある生徒では言葉の発達に偏りがあり、コミュニケーションがうまくできないことがあります。このような様子は学習や生活の様々な場面で見られるので、場面に応じて、言葉を添えて生徒に確認したり、図や写真などを使って説明するよう勧めたりといった指導が必要になります。障害のある生徒に起こるこのような困難に対し、自ら乗り越える力を育てる指導が**自立活動の指導**です。

文部科学省の「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」には、「自己に対する肯定的なイメージを早期から育てることも大切」(同解説 p85)とあります。実践②のように20歳になった自分を肯定的にイメージさせることは、将来への明るい展望につながり、学校生活で起こる障害による困難を乗り越えるために役立ちます。

また、「自分が何のために、何をするのかを理解し、学習に意欲がわいてくるような、指導内容を取り上げることが大切である」(同解説 p85)ともあります。実践②では、「自立活動の時間の学習が将来の自分に役立つ」という意識をもって学習するよう生徒に働きかけたところ、Bさんが「少し苦手なところもあったけど、自分のためにと頑張ってがんばれた」という感想を述べていました。このことから、Bさんが自立活動の時間の学習を行うことの大切さを理解しながら学習を進めていたことがうかがえます。

実践②のよさは、生徒に自己の肯定的なイメージを育てつつ、生徒が自ら課題意識をもちながら自立活動の時間の学習を進められるよう配慮したことです。このことが、学習したことを生かして学校生活を送るようになったBさんの変容に表れています。

< 2つの実践から考えられること >

特別支援学級に在籍している生徒の、将来の自立や社会参加をめざした指導を充実するために必要なことは何でしょうか。2つの実践から考えてみましょう。

2つの実践で共通していることは、**障害の特性に配慮しつつ、生徒の将来への思いをふくらませる実践**を行っていることです。

○障害の特性に配慮しつつ実践を行う

特別支援学級には、知的障害や自閉症など障害のある生徒が在籍しています。このような生徒に対し、障害によって起こる学習上・生活上の困難を乗り越える力を養うことはもちろんですが、障害の特性を考慮して指導を行うと、より効果的に指導を進めることができ、生徒の主体的な動きを引き出すことができるといえます。

○生徒の将来への思いをふくらませる実践を行う

実践①では体験をとおして、また実践②では具体的な問いかけをとおして、生徒の漠然とした将来への思いを明確にしています。将来への思いが将来像として明確になると、生徒は将来に希望をもって主体的に動けるようになります。これは、生徒が自分の思いをふくらませた様子にとらえることができます。

「将来こんな仕事をやってみたい」「こんな大人になっているだろうな」という生徒の思いを見取り、具体的な体験や問いかけをとおしてその思いを将来像として明確にし、ふくらませるよう指導することが大切だといえます。

つまり、特別支援学級に在籍する生徒の、将来の自立や社会参加をめざした指導を充実させるためには、



**障害の特性に配慮しつつ、
生徒の将来への思いをふくらませることが大切です。**

今回の調査研究は中学校の特別支援学級を対象に行いましたが、障害のある子どもの将来の自立や社会参加をめざした指導は中学校だけで行うものではありません。小学校の特別支援学級においても、よりよい自分になりたいという児童の思いをふくらませるよう指導し、それを中学校の指導につなげるよう工夫したいものです。

この指導資料を、以上のような観点で小学校や中学校の特別支援学級の指導の充実に役立てていただければ幸いです。

【参考文献】

- ・阿部芳久 2006 知的障害児の特別支援教育入門―授業とその展開― 日本文化科学社
- ・青戸泰子・松原達哉 2008 自己プランニング・プログラムにおける「他者とのポジティブなかかわり」の効果―夢も希望ももてない不登校生徒への援助事例― カウンセリング研究, 41, 304-314.
- ・ジーン レイヴ エティエンヌ ウェンガー 佐伯 胖 (訳) 1993 状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加 産業図書
- ・鯨岡 峻 2006 ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性 ミネルヴァ書房
- ・三村隆男 2008 新訂 キャリア教育入門 その理論と実践のために 実業之日本社
- ・文部科学省 2009 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編
- ・村上靖彦 2008 自閉症の現象学 勁草書房
- ・中尾繁樹 (編) 2009 「特別」ではない特別支援教育③ みんなの自立活動 特別支援学級・通級指導教室・通常の学級編 明治図書
- ・日本キャリア教育学会 (編) 2008 キャリア教育概説 東洋館出版社
- ・佐々木正美 (監) 2004 自閉症児のための絵で見る構造化 学研
- ・スティーブン E. ガットステイン 坂本輝世 (訳) 2006 R D I 「対人関係発達指導法」―対人関係のパズルを解く発達支援プログラム クリエイツかもがわ
- ・栃木県教育委員会事務局特別支援教育室 2010 特別支援学級及び通級による指導 教育課程編成の手引
- ・栃木県教育委員会事務局特別支援教育室 2011 リーフレット「小・中学校及び高等学校における発達障害のある児童生徒へのさらなる指導を目指して」
- ・栃木県総合教育センター 2007 キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料―生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために―【中学校・高等学校編】
- ・栃木県総合教育センター 2008 キャリア教育に関する参考資料 (小学校編) 「生きる力」を育むキャリア教育―小学校における理解と実践のためのQ&A―
- ・渡辺三枝子 (編) 2007 キャリアの心理学 新版 ナカニシヤ出版



がんばろう日本!
元気をとちぎから。



栃木県総合教育センター

設立20周年

「とちぎの教育を未来に繋ぐ」

をテーマに記念事業を実施します。

平成24年10月20日（土）

平成23年度 調査研究
中学校特別支援学級における
将来の自立や社会参加をめざした指導の充実

発行 平成24年3月
栃木県総合教育センター教育相談部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7210 FAX 028-665-7212
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

がんばろう日本!
元気をとちぎから。

